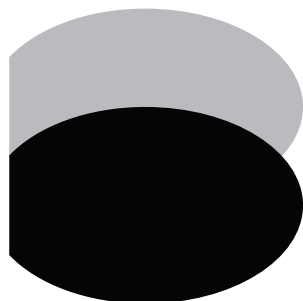


20230731

絵本学会 NEWS No.76

発行：絵本学会
発行日：2023年7月31日
編集：絵本学会広報委員会
絵本学会事務局：〒100-0003
東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル（株）
毎日学術フォーラム内
電話：03-6267-4550
Mail：maf-ehongakkai@mynavi.jp
HP：http://www.ehongakkai.com



絵本学会

- ・第26回絵本学会大会開催報告
- ・第26回絵本学会定期総会議事録
- ・研究委員会からのお知らせ
- ・紀要編集委員会からのお知らせ
- ・事務局より
- ・役員選挙のお知らせ
- ・絵本学会理事会報告

■第26回 絵本学会大会（6月17日・18日、大阪大谷大学）開催報告■ 大会テーマ：“よりどころ”としての絵本

第26回絵本学会大会は、2023年6月17日、18日の二日間、大阪大谷大学志学台キャンパスで開催された。関西での絵本学会大会開催は第19回大会以来、対面での開催は第22回大会以来である。2日間共晴天に恵まれた中、会員（準会員を含む）114名、一般108名、学生6名、計228名の参加があった。

1日目は田島征三氏の基調講演と研究発表Ⅰ、2日目は研究発表Ⅱと作品発表を行い、懇親会の開催は見合わせたものの、コロナ禍前とはほぼ変わらない開催方法をとることができた。会員同士が「久しぶり！」と笑顔で声を掛け合う様子を、対面開催できることの喜びをあらためて感じた。

大会を締めくくるラウンドテーブル「つなぐ・つながる・つながりあう」では、どの会場も活気に満ち溢れていた。本学会が設立当初から掲げてきた、読み手、作り手、研究者など絵本とさまざまな形で関わる者が集い、「よりどころとしての絵本」というテーマに支えながら、共に絵本について考える場になったのではないかと感慨深かった。

本大会は、本学幼児教育専攻の学生や教職員はじめ、さまざまな方の協力なくしては開催できなかった。特に、加藤啓子さんとこしだミカさんには、ラウンドテーブル③の登壇者としてだけでなく、2日間大会を共に作り上げていただいた。加藤啓子さんは学生と共にひろばを作ろうと「絵の本いろいろの会」の皆さんと半年前から関わってくださり、絵本の自由な楽しみ方を参加者にやさしく示唆して下さった。こしだミカさんの魂のこもった作品は、受付付近で参加者をあたたかく、そして熱く迎えて下さった。

さらに、大阪総合デザイン専門学校、京都芸術大学、静岡文化芸術大学、筑波大学、横浜美術大学、梅花女子大学の卒業生、および在学生の絵本作品展示も、これからの絵本の未来や希望を感じさせてくれた。

参加者とこの大会に関わってくださったすべての皆様に、心よりお礼申し上げます。

（文責：鈴木穂波）

【協賛】

朝倉書店
一藝社
株式会社 みらい
関西こどものとも社
チャイルド社神戸営業所
福音館書店
萌文書林

【協力】

飛鳥・樫原ユネスコ協会
絵の本いろいろの会
大阪大谷大学教育学部教育学科幼児教育専攻

【第26回絵本学会大会実行委員会】

生駒 幸子（龍谷大学短期大学部）
木戸 まや（梅花女子大学）
香曾我部 秀幸（梅花女子大学）
児玉 茜（国際国立美術館・金城学院大学）
関 純奈（愛知工業大学附属図書館）
高原 佳江（甲南女子大学）
土居 安子（大阪国際児童文学振興財団）
松本 崇史（社会福祉法人任天会 おおりの森こども園）
丸尾 美保（絵本学会理事）
村中 李衣（ノートルダム清心女子大学）
鈴木 穂波（大阪大谷大学）



基調講演「絵本と生きる」 田島征三

第1部 講演

第2部 ディスカッション

聞き手：水野恭子（岡崎女子大学）

鈴木穂波ゼミナール4回生（大阪大谷大学）

司 会：鈴木穂波（大阪大谷大学）

今回の大会テーマは、「“よりどころ”としての絵本」。コロナ感染拡大、ロシアによるウクライナ侵攻、頻繁に起きる自然災害、国内外問わず昨今の不安定な社会状況の中、絵本は私たちにとってどのような存在なのだろう。厳しい状況の中で、絵本は私たちの“よりどころ”となり得るのか。この問いに迫るべく基調講演をお願いしたのは、半世紀にわたり絵本を描き続けてこられた田島征三さん。その活動の場は昔も今も絵本だけにとどまらず、現在も鉄の彫刻やランドアートなど、多様で意欲的である。

同じく絵本作家として活躍する双子の兄弟田島征彦さんとのツーショット画像から、ご講演は始まった。ウィットに富んだ話しぶりに会場が笑いに包まれたり、人間の身勝手な戦争や環境破壊に対する静かな怒りに耳と心を傾けたりしながらの濃厚な時間だった。

「ベトナムの子供を支援する会」の野外展での長新太や西村繁男、内田麟太郎との出会いについても深く語られ、その当時の作品画像も見せていただいた。現代の日本の絵本の礎を築いてきた絵本作家たちの精神が躍動する姿が生き生きと伝わり、彼らの絵本と対峙することへの覚悟ができていくのか、生半可な気持ちで関わっていないかと問われているようだった。

エッセイ『絵の中のぼくの村』（くもん出版、1992年）でも語られている少年時代の高知での生活での少年「センジ」とのエピソードから絵本『しばてん』（偕成社、1971年）の誕生、「ベトナムの子供を支援する会」の活動、日の出町廃棄物巨大処分場建設反対運動に見られるように、田島の創作活動の根本には常に自戒の念がある。生の声で伝えられる、自分への怒りにも似た叫び。根っこがそこにある田島征三の絵本作品は、まさに「生きる」ことだと実感させられた。

講演後のディスカッションには、田島の絵本『とべバツタ』（偕成社、1988年）に突き動かされて絵本『とべかぶとむし』

を作った小学三年生の水野政崇くん、そしてその絵本を製本した鈴木ゼミナール4回生8名が聞き手として参加した。岡崎女子大学の水野恭子先生が語る息子の政崇くんの自然の中で生きものの命を感じる現実体験と絵本体験を行き来する姿から、その傍らにある田島の絵本はまさに“よりどころ”としての絵本の姿ではなかろうかという思いが強くなった。

さらにコロナ禍に大学に入学し、私から見れば随分と遅く学生生活を送ってきた4回生ゼミ生たち。彼らが政嵩くんを通して田島征三という絵本作家に出会った感動と、それを見届ける私たちが過ごした時間は、ほんのわずかなものかもしれないが、今の不安の先に未来への希望を感じさせてくれるものだったのではないだろうか。

（文責：鈴木穂波）



研究発表 I 6月17日(土)

会場 A 座長：藤本朝巳・生駒幸子

1. 林明子の絵本制作過程の研究～『こんとあき』ダミー本後半4作品の変遷から見る

関純奈(愛知工業大学附属図書館)

前年度大会での研究発表「林明子の絵本制作過程の研究～『こんとあき』ダミー本前半4作品の変遷から見る」に続き、絵本作家林明子(はやし・あきこ 1945-)の代表作の1つ『こんとあき』(福音館書店 1989)の制作過程を示す8作のダミー本のうち後半4作品の変遷を比較し考察した。発表者は前半4作品の分析をふまえ、後半4作品も表を用いて視覚的に刊行作品との比較検討を行った。ダミー本には刊行作品に内包されたテーマが制作過程で深化していくことに言及し、担当編集者である征矢清との信頼関係のもとで試行錯誤しながら、真摯に絵本制作に向き合う林の姿勢の片鱗が垣間見えると結論付けた。作家の絵本制作の過程をうかがい知る貴重な資料をもとに、『こんとあき』の魅力に迫る興味深い発表であった。

2. 『かたあしだちのエルフ』の自己犠牲とはー臨床心理学的観点からの検討ー

藤井淳子(星槎大学大学院・航空自衛隊)

発表者は、絵本『かたあしだちのエルフ』に読み取られるテーマである「自己犠牲」について、臨床心理学的観点から検討した。ストーリーには日本の神話や昔話と一線を画す展開が見られるとし、作者の生きた時代背景や様々な表現手法から、エルフは第二次世界大戦で戦死した若者たちの象徴的存在ではないかと解釈する。これまでの日本神話に見られるように、生かされる者が自己犠牲的存在を神格化して現実世界と切り離すことによって、犠牲となった存在に対する罪悪感から解放される展開ではなく、戦争犠牲者の存在は戦後社会の日常に「共有」され、その存在によって生かされる恩恵と痛みを包摂する現実世界を形成する一要素となることに言及した。本作は日本社会が「自己犠牲」的存在を切り離さず、彼らの痛みを目に向け、共生を試みる時代へと変化することを予感させると結論付けた。作品のテーマ「自己犠牲」の内実に深く迫り、現代的意味を付与する挑戦的な研究発表であった。

3. 加古里子絵本の時間経過表現～文と絵の効果的なコラボレーション～

前田敬子(仁愛女子短期大学幼児教育学科教授)

発表者は、加古里子の絵本における絵画表現のうち時間経過の表現「異時同図」に焦点を絞り、エッセイ『絵本への道』(福音館書店、1999年)上梓の前後での表現の変遷を考察した。加古は著書『絵本への道』で「絵本の表現法」として掲げた時間経過の表現は未だ紙芝居の表現に近いものであった

が、『絵本への道』出版後では場面の区切りを感じさせない「連続する時間の幅を一枚の絵に封じ込める」時間経過の表現が見られる。加古は文と絵の配置で読者の視線を誘導する、絵本ならではの時間経過の表現、つまり文を読み進むことで時間が流れる「文と絵」が協力し合う絵本表現に昇華させたと結論付けた。作家が紙芝居と絵本の表現形式の違いを認識することで絵本表現を変化させていった過程を、具体的な絵本の絵の配置等からも検討する緻密な研究方法が印象的であった。

会場 A では作家の作品制作や作品読解に多様な切り口から迫る興味深い研究発表が行われ、フロアからも多くの質問や意見がありそれぞれが研究における新たな視点を見出だす研鑽の場となっていた。子どもと絵本に関わるさまざまな立場の人々が、研究発表において豊かな交流ができたことに感謝したい。

(文責：藤本朝巳・生駒幸子)

会場 C 座長：水島尚喜・土居安子

1. 文字なし絵本の歴史ー19-20世紀前半の事例調査

山本 美希(筑波大学)

物語性を基軸とした「文字なし絵本」に関する精緻な歴史研究である。

従来、文字なし絵本と呼ばれる絵だけで構成された絵本は20世紀半ばまでは事例がなく、20世紀後半に入ってから顕著になったとされていた。発表者は、1902年にフランスで刊行された事例等、19世紀から20世紀前半までの該当例を紹介しながら、文字なし絵本の形成過程を丹念に追跡する。また、サイレントコミック分野なども見据え、その関連性について仮説的な考察を行なっている。中間報告ではあるが、絵本学の基盤に関わる貴重な研究内容である。

今後、感覚性を基軸とした「ノンバーバルブック」との位相も含め、研究の更なる展開が期待される。

2. 文字なし絵本の周辺要素の考察ー読みの手がかりとして

永井 雅子(都留文科大学非常勤講師)

発表タイトルにある「周辺要素」とは、ジュラール・ジュネットの「ペリテキスト(peritext)」に該当する。発表者はその内容を「カバーとカバーの袖、表紙・裏表紙、見返し、扉、奥付、序文、あとがき、挿入紙葉」として、文字なし絵本を分析した。結論として以下3点を挙げている。

- ①大人と子どもの両方の読者を持ち、読者の自由な解釈を求める文字なし絵本にとっては、あとがきは有効である。
- ②文字なし絵本の内容や対象とする読者により、求められる周辺要素の姿は異なるがゆえに、文字なし絵本のジャンル別の分類が必要である。
- ③文字なし絵本の定義は、文字の有無だけでなく、周辺要素の存在も考慮されなくてはならない。

本研究は、文字なし絵本をペリテキストの観点から分析し、文字とイメージの織りなす関係性を問い返す内容となっている。

3. 1990 年代以降の現代アーティストによる絵本の仕事

児玉 茜 (国立国際美術館・金城学院大学)

発表内容は、現代アーティストによる絵本作品の内、1950 年から 1989 年までを前半期として分析を行なった昨年度からの継続研究である。今回は、1990 年から 2020 年の期間(後半期)に出版された内容についての調査・分析を加えた総括的発表となっている。

結論として、前半期はデモクラート協会などのグループの動向を起点とする出版が多く、編集者の意向による意図的な起用が背景にある。現代アーティストによる絵本の土壌づくりの期間と位置付けている。後半期では、現代アーティストは、個人の表現活動の一環として絵本製作している傾向がある。その中で、元永定正は一貫して抽象絵画による絵本を出版し、作品数が他のアーティストに比較し大幅に多い。この継続性が絵本表現の一形態として一般に認知されたと指摘する。

(文責：水島尚喜)

会場 D 座長：丸尾美保・長野麻子

1. 絵本にみるシンデレラ物語の神話性－階段の表現をめぐって

山下彩華 (筑波大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程)

シンデレラ物語の絵本表現において、クレイン、ドレ、デュラックの3人の画家が描いた、主人公が階段を下りる場面を比較分析し、その背後の文化的表象の影響と近代のシンデレラ物語のイメージ生成の過程を検証しようという意欲的な研究であった。発表者はまず民間伝承のシンデレラ物語の異文についての先行研究を整理し、近代に形成されたシンデレラ物語の型を提示した。しかし原典のペロー版では、シンデレラが片方の靴を落とす場面、階段に関する記述がないにもかかわらず、20 世紀初頭以降の多数の絵本作品に階段の描写が見られるという。発表者はこの点に注目し、階段の文化的象徴性に関する記述や論考を旧約聖書からベンヤミンの思想まで引用しつつ、上記の画家たちによる階段の描写における解釈を試みた。その結果、階段とは潜在的な神話の最も重要な建造物として、異界へのファクターを表すものであり、シンデレラは超自然的な人物として、王宮という異世界につながる存在であることが結論として示された。

聴講者からの質疑では、クレインの絵に見られる階段の短さと神話性の関係や、階段の描写が 20 世紀初頭に多く見られるようになった経緯が問われ、活発に質疑応答がなされた。

2. Beatrix Potter の作品と喪失の旅－翻案としての『こぶたのロビンソン』

三井敏朗 (相模女子大学非常勤講師)

ポターの『こぶたのロビンソンのおはなし』の物語の持つ特異性を、瀬田貞二の「行きて帰りし物語」の法則と照らし合わせ、また、ポターの『ピーターラビットのおはなし』や『ベンジャミン・バニーのおはなし』などとの比較から相違点を明らかにし、ポターが少女時代から抱いていたとされる家庭への憎悪と反抗の観念との関係において、作品解釈を行おうとする研究であった。発表者は『ピーターラビット』や『ベンジャミン・バニー』の作品を主人公が禁を犯し、敗北し帰宅する喪失の旅と位置付けるのに対し、『こぶたのロビンソン』を主人公が旅の果てに幸福となり、「帰らない」物語として位置付け、作品に描かれている農場の暮らしや人間と動物の関係、ロビンソンの無人島での幸福な人生に特異性を見出す。それは「行きて帰りし物語」とも下敷きの『ロビンソン・クルーソー』とも異なる。発表者はその理由として、クッツァーの先行研究を引用しながら、ポターにとって家庭が抑圧の場であり、作品の背景にポターの自立願望があったからではないかと解釈する。

本発表はテーマの着眼性では優れているが、物語の特異性を検証するにあたり、論点をより明確にし、十分な資料の精査が行われるとなおよいであろう。

3. 複数存在する日本語訳についての考察～『het spook nijntje』を中心に～

岸田容子 (JPIC アドバイザー)

ブルーナの het spook nijntje をめぐる2つの日本語版『ミッフィーのおばけごっこ』『うさこちゃんおばけになる』の日本語訳の文の表現の相違点を考察し、シリーズ全体の魅力を明らかにしようとする研究であった。発表者は角野訳と松岡訳の出版時期の差や日本における nijntje シリーズの出版歴等を踏まえ、両訳を表題、登場人物の名称、1 ページあたりの行数から比較した。また文の書体や文における片仮名・記号の使用の点にも着目し、そこから角野訳の講談社版が会話を文法通りに鉤括弧で括り、物語文として翻訳しているため、行数が各ページで異なるのに対し、松岡訳の福音館書店版は原著が脚韻を踏んでいることを考慮し、原著と等しく各ページ4 行の詩的な文章にまとめられていることを指摘した。このため、作品を声に出して読んだ時の効果や印象について、松岡訳は耳馴染みがよく、自然と惹きつけられると評価しているが、角野訳については、聞き手が「もっと絵が見たい」という欲求に気づかぬまま読み急ぎ、ページを戻すことになる可能性を懸念している。一方で、松岡訳はすべての文が平仮名で表記されているのに対し、角野訳は片仮名や鉤括弧が使用されているため、読み手の大人にとり読みやすい面もあると評価する。

発表者は松岡訳を高く評価していることが窺えたが、絵本の読み手と聞き手に与える印象についてはやや恣意的な判断と

も受け取られるため、今後、さらに客観的な検証を行うことが望まれる。

(文責：長野麻子)



研究発表Ⅱ 6月18日(日)

会場 A 座長：馬見塚昭久、生田美秋

総評

実践研究(応用研究)が増えてまいりました。実践から理論へ、理論から実践への不断の往復により絵本学が豊かになることを期待しています。

1. 日韓の絵本による街づくりーポストコロナに向けて人が集まる場の必要性を考える

尹恵貞(一橋大学)・小松麻美(神戸芸術工科大学)

発表者は、ポストコロナにおける人々の社会的な交流の糸口となりうる絵本の力に着目し、交流を通じた街づくりに役立つと考えられる図書館を調査・取材した。対象としたのは、東京都葛飾区にある子どものための図書館「絵と言葉のライブラリーミッカ」と韓国初の市立絵本専門図書館「順天絵本図書館」の2つである。いずれも、子どもたちが落ち着いて過ごせる温かな空間づくりや想像力を刺激する意匠を凝らしたデザインなどが特徴的で興味深い内容だった。なお、「共同注視」による「場の生成」の働きが、街づくりに大きな役割を果たしていると言えるのかどうかの仮説、及び、「絵本による街づくり」という場合の、「絵本による」の意義について更なる検証を期待したい。

2. 絵本でつなぐまちづくり「しべつ絵本ツアー」の実践

若林みずほ(北海道士別市立士別南小学校司書教諭、絵本専門士)

発表者が自ら考案して立ち上げた「しべつ絵本ツアー」(主催・しべつ絵本でつなぐまちづくり実行委員会)について、その基本理念や内容の紹介とともに、「絵本でつなぐまちづくり」の、「絵本ならではの力」が説得力を持って報告された。「絵本でつなぐまちづくり」は、人と人とが、ゆるやかに、体験を通してつながるという、行政によるまちづくりとは大きく異なる魅力があることを明らかにした。

3. 図書館における布の絵本の提供について

林左和子(静岡文化芸術大学文化政策学部教授)

障がいのあるこどもたち一人一人にふさわしい布の絵本を届けるためには、図書館での、「布の絵本」と「さわる絵本」の区別、視覚障害者向けと自閉症向けの区別を明確にした上で、読み語り会を開催したり詳細な目録を作ったりすることが必要だとする報告であった。今後の調査研究によって、課題の指摘に留まらず、意欲的な取り組みや成功例が紹介されることを期待したい。

(文責：馬見塚昭久・生田美秋)

会場 C 座長：佐々木由美子、山本美希

1. 「中国の絵本の現状と課題—日本の絵本形成史をふまえて」
張雅晴（北陸大学編入生）

日本と中国における絵本の捉え方の違いを明らかにするため、両国の幼児を持つ親に対してアンケート調査を行い、また中国において絵本創作の教育を手がけている楊忠氏のインタビューを分析し、その結果から現在の中国における絵本の現状と課題について分析した研究であった。中国の親は、日本の親に比べ「役立つ内容」「知識」などを重視する傾向があることを指摘した。

会場からは、タイトルにある「日本の絵本形成史」との関係についての質問や、より多くのインタビューを分析する必要があるのではないか、といった提案が出された。

2. 「中国語圏における絵本表現の現在」

浅野法子（大阪成蹊短期大学）

発表者は「中国語」ではなく「華語」を用いることで、中国に限らず幅広い地域における中華系の作家の創作物について捉え、華語絵本を対象として毎年顕彰する「豊子愷児童图画書賞」の受賞作の表現や特徴を分析した。例えば、この賞を受賞している頼馬（ライマ）による絵本『おこりんぼうのアングリー』は、出版された場所によって内容の絵に変更が見られることが指摘された。また、日中児童文学美術交流センターの設立にも関わった中由美子氏の仕事や遺された資料の整理についても紹介された。

会場からは、中氏の資料についてより詳しく知りたいとの意見が上がり、今後いっそうの進展が期待される。

3. 「読み手の心を動かす作品の構造についての考察—
ヴィゴツキーの『芸術心理学』を軸に」

伊藤美和子（花園大学）

20世紀初頭にロシアで活動した心理学者L. S. ヴィゴツキーの芸術論をもとに、昔話のどのような構造が読み手に「感動」をもたらすのかを考察した研究。分析の対象としたのはクルイロフ寓話「狼と子羊」で、狼と子羊の緊張関係が高まり、やがてクライマックスにおいてカタストロフィ（崩壊）とカタルシス（浄化）をもたらす。ヴィゴツキーは、内容を克服する形式を持つ芸術作品に触れることによって、人間の感情が高次へ引き上げられると考えたと論じた。

会場からは、人間の感情は高次へ一律に引き上げられるのかについての質問や、リュティの「純化」との比較についての意見があった。

（文責：佐々木由美子、山本美希）

会場 D 座長：村中李衣、鈴木穂波

1. 絵本における「行きて帰りし物語」と保育の場での子どもの絵本体験

村田 康常（名古屋柳城女子大学）

黒岩 茉由（名古屋柳城短期大学附属柳城幼稚園）

保育の場での「子どもの絵本体験」と「絵本の物語構造」との関係性を明らかにするために、瀬田貞二の『絵本論』（1985）を踏まえ、絵本の物語がもつ往還運動と、子どもの絵本体験における往還運動との呼応を検討しようとするものである。

子ども読者の絵本への「没入」と「冒険」、現実への「帰還」の往還運動をいかに捉えるかを論点として、保育者が記述した保育の場での子どもたちの絵本体験のエピソードを考察し、この往還運動に呼応する絵本の「行きて帰りし物語」の構造に照らして絵本を読解することが試みられた。

会場からは、集団読みだからこそその特質を踏まえた結果の考察や、「帰り」や「帰った後の世界」という着目点に関してのさらに踏み込んだ考察への課題が、期待を込めて明らかにされた。

2. 絵本の読み聞かせについての一考察—学生の絵本についてのアンケート結果より—

金子 亜弥（埼玉東萌短期大学）

保育者養成校の学生が授業や実習を通して、どのように絵本の読み聞かせというものを意識しているのかをアンケートから読み取り、今後の授業方法に活かそうと考察するものである。

アンケートからは、絵本を楽しむことはできるが「学修」という視点で見るとを好まない学生がいることが分かったとのことだった。その要因として、実習園からの学生への要望内容が、実際に授業で指導している強弱をつける、ゆっくりページをめくるといった「正しい読み聞かせの仕方」とは異なり、保育所保育指針とは乖離していることが指摘された。

会場からは、保育現場での経験が学生にとってマイナスに働く場合があるという捉え方に対し、同じような実習指導を行っている現場職員や実習生を受け入れている園側の参加者から、戸惑いの声が上がった。さらに、発表者の「絵本への関心と実践力のある保育者を育てる」という目標に照らし、アンケート結果を授業改善に結び付けるような具体的な検討をするべきではないかという、学会発表の姿勢を問う意見も出された。

（文責：鈴木穂波）

作品発表

座長：香曾我部秀幸、宮崎詞美

①『あの日の月見草』曾子安（京都芸術大学大学院生）

エーリッヒ・フロムの『愛するということ（The Art of Loving）』、田中昭史写真集『多摩景』の伊藤俊治によるあとがきから人間が求める他者との一体感について考察した作品。「きみ」と「ぼく」という小さな繋がりを示す言葉とやわらかく静謐なイラストレーションをしかけとして普遍性のある感覚へ読者を導き、孤独を優しく包み込む壮大な世界観を表現することを試みた。

②『おちばのフィーリング』藤井スミ苑（ひこね児童図書研究グループ）

読みきかせを中心に活動をしている作者が、落ち葉の美しさ、自然物のもつ形状の華やかさからひらめきを得た作品。落ち葉のカラーコピーをコラージュし切り絵の手法を取り入れ、縦型に展開する画面をダイナミックに挿入し、絵本の絵をリズムカルに読むことの楽しさを示した。絵本活動のために長年続けている膨大な量の模写記録ノートも表現の礎として提示された。

③『いとおかし』加賀美裕子（美術の祭典東京展「絵本の部屋」事務局）

水に身を任せて泳ぐ人々の姿を刺繍によるイラストレーションで描いた作品。上下左右様々な方向から開く構造となっている。本作は文字なし絵本だが、同時に展示された「赤い糸で描かれた文字」が縫う行為と共に受け継いできた時を語り、布をたぐりよせ針を刺し糸を前進させる中で「命」と向き合い「身も心も開放されるとは」無心に問い探り続ける姿が垣間見えた。

④『えのぐ』手良村昭子（関西学院聖和短期大学）

絵本と音楽や音との融合を試みる作品をつくり続けている作者が、今回は子どもが初めて絵の具と出会い親しむ感覚を色彩豊かな抽象形態とオノマトペで表現した。絵本を全開にせず90度の縦開きで机の上に置いた時、子どもの豊かな表情の変化と机の上に展開する「絵の具遊び」の痕跡が再現される。コミュニケーションから生まれ、コミュニケーションツールとなる絵本である。

作品発表の場は、作品とその制作プロセスや分析・制作研究成果のみならず作者自身の持つメッセージを受け取ることでできる機会である。

今回の大会テーマ「“よりどころ”としての絵本」にふさわしい様々な表現の作品が集まり、3年ぶりに実物に触れることのできた作品発表は、絵本と人との出会いと寄り添いを求め続ける多くの参加者と発表者の胸を互いにうつものであったに違いない。

（文責：宮崎詞美）

ラウンドテーブル

「つなぐ・つながる・つながりあう」

1. 「つなぐ：子どもと絵本—児童書専門店・幼稚園・保育園の取り組みから—」

パネリスト：天島あゆ美（児童書専門店 Karite）

小澤佐季子（梅花幼稚園こうめ文庫）

山下乃里江（社会福祉法人あおば福祉会瀬川保育園）

コーディネーター：関純奈（愛知工業大学附属図書館）

ネットには情報が氾濫し、大型書店でも売れ筋の本ばかり並ぶ昨今。子どもたちが絵本に出合うための場として、児童書専門店や幼稚園・保育園の絵本文庫の役割は、一層重要性を増している。ラウンドテーブル①では、地域の子育て世帯に寄り添う児童書専門店、研究機関としての側面も持つ大学附属の幼稚園の文庫、園生活や行事と絵本が密接に結び付いた保育園の文庫が集い、それぞれの「子どもと絵本をつなぐ」取り組みについて語り合った。

児童書専門店 Karite の天島あゆ美氏には、自身の子育てでの経験を下敷きに、様々な人の「糧（かりて）」となる場所をという主旨のもと、空間設計や他店とは一線を画す選書等のこだわりを説明していただいた。また、絵本を介した音楽や科学の教室、自治体と連携した独自性豊かなイベントの紹介は、地域の子育て支援の拠点としての実店舗の意義と可能性を示唆することとなった。

梅花幼稚園こうめ文庫の小澤佐季子氏には、故三宅興子氏が創設された歴史ある絵本文庫について、園児のクラブ活動と学生の研究活動という両側面から、棚づくりや活動内容、記録等に関する論理的な分析を披露していただいた。コロナ禍による活動休止の影響で、成長過程で出合うべき絵本が抜け落ちてしまったり、伝承遊びや読み合いの関係が分断されてしまったりという事例は、大変意義深い問題提起であった。

瀬川保育園の山下乃里江氏は、絵本と密接な関わりの中にある園の活動の様子を、沢山の写真とともに紹介して下さった。読み聞かせ活動にまつわる微笑ましい一幕に始まり、クラスごとに絵本を題材に表現遊びに取り組む運動会や発表会での園児たちの姿を見て、「可愛い」と会場は和やかな雰囲気包まれた。

後半の質疑応答では、文庫活動と他の教職員との関わりや研修内容、経営の苦労、今後の展望など、活動や運営の内情に関する質問が多く寄せられたが、これは紹介された実践例を自分たちも取り入れたい、という意欲や興味の表れと解釈できるだろう。また、子どもと絵本をつなぐための選書に関する話題では、ロングセラーの力を信じて中心に据えつつ、他では出合えない名作を揃えたり、図書館を活用して実際に子どもた

ちと読み反応を確認してから購入したりと、三名とも信念をもって真摯に選書に取り組まれる姿勢が共通し、印象的だった。



本ラウンドテーブルを通して、こうした専門店や文庫は、子どもと絵本のみならず、親子や地域の人々など、実に幅広い対象をつなげる場となる可能性を秘めていると、改めて実感できた。今後は、互いに垣根を越えて情報共有し、連携することで、そうした「よりどころ」としての存在意義がさらに高まっていくであろう。この機会が、登壇者や参加者、会場全体をつなぐ架け橋となり、その第一歩を踏み出すことができたのなら幸いである。

(文責：関 純奈)

2. 「つながる：子どもの造形遊びと絵本」

パネリスト：きたむらさとし (絵本作家・神戸市外国語大学
客員教授)

水島尚喜 (聖心女子大学)

山本将之 (大阪大谷大学)

コーディネーター：鈴木穂波 (大阪大谷大学)

保育・幼児教育の場では、子どもが絵本の世界を共有することから遊びへとつながる姿が見受けられる。本ラウンドテーブルでは中でも子どもの「造形あそび」に着目し、きたむらさとしさんによる造形ワークショップを実際に体験しながら、子どもの造形あそびとの視点から絵本について考えようと試みた。

まず鈴木が、保育・教育における遊びの事例集や教育課程での活用を例示したもの、作家自らが自身の作品から遊びへの提案をしているものなど、絵本と「造形あそび」や「造形ワークショップ」として多様な書籍が刊行されている現状を紹介した。

幼児を対象とした造形教育を実践してこられた山本将之先生は、「行為」や「感触」そのものを楽しむ遊びが「造形あそび」であるとし、その前の導入の大切さをあげられた。そのうえで、絵本は作家の表現として完結するのではなく、見る人の「やってみたい!」という気持ちを引き出し、興味を広げ、世界を広げ、導入としての役割を果たすことができると語られた。おすすめの絵本としてご紹介いただいた『こんにちは!わたしのえ』(はたこうしろう作、ほるぷ出版、2020年)によって、会場全

体が造形あそびへと気持ちを動かされるような雰囲気の中、きたむらさとし先生へバトンタッチされた。

きたむらさとし先生は自己紹介とともに、中南米を中心にさまざまな国の小学校等で実演されている紙芝居をご披露くださった。シルエット当てはシンプルだが展開に起承転結があり、きたむらさん独特のチャーミングさもある。作り方の種あかしもしていただき、きたむらさんも街で偶然見かけたものからアイディアを得たと明かしてくださった。児童文化財とは、こうして受け継がれていくものなのだと実感させられた。

和やかな空気に包まれる中、次はライオンのライオネルが、床屋さんでロック・スターらしい髪型を見つけようとするという紙芝居。床屋さんが次々に描く個性豊かな髪型に、思わず笑いがこぼれる。そこから、参加者も髪型を描くワークショップへ。きたむらさんも驚くような斬新な発想の髪型がそこかしこで生まれ、全員で顔はめをして記念写真。電気を消しての幻想的な紙芝居で、夢のような楽しい時間は幕を閉じた。



最後に、幼児、初等及び中等造形美術教育学を専門とされている水島尚喜先生には、義務教育段階での制度的側面における造形あそびの位置づけを解説いただいた。子どもは「絵」という見えるものからの影響によって、自分でも同じように見えるものを作り出したいという気持ちにつながっていくという言及に、物語の世界を自分の中に取り込む子どもたちの原初的な力や、子どもの感性を刺激する絵本の力への期待を持つことができた。

時間の都合上フロアから意見をいただくことはできなかったが、通常なかなか同じ場に集うことのない方々に話題提供いただくことによって、子どもに深くはたらきかける絵本の力を考えていくための糸口を、それぞれに見つけることができたのではないだろうか。

(文責：鈴木穂波)

3.「つながりあう：絵本を描く、届ける、読みあう…そしてその先に」

パネリスト：加藤啓子（絵の本あれこれ研究家）

こしだミカ（絵本・造形作家）

コーディネーター：村中李衣（ノートルダム清心女子大学）

冒頭に、村中李衣さんから「絵本を介してつながりあう」とはどういうことかという問題提起がなされ、加藤啓子さんとこしだミカさんが、映像記録を見せながら、それぞれの活動を報告された。

加藤啓子さんは写真を含む絵の本を100～1300冊選びすべて表紙が見えるように展示。参加者が自由に手にすることができる「絵の本ひろば」「絵本展」の実践をしている。「絵の本ひろば」は 図書館に縁のない、行くことのできない、本を読むこと自体に抵抗を感じている人のところへ出かけ、そこが心地よい場となるよう配慮している。特に選書にはこだわり、絵本のみでなく、文章や文字がほとんどない人物、風景、動物、街中の写真集、加えて多くの料理本を展示し、「本」への垣根を取り払い、誰もが気楽に楽しめる工夫を凝らしている。

主に ひろばをするのは 小学校、幼稚園、保育所、特別支援学校、支援施設、作業所、放課後デイサービス、高齢者施設。その他、美術館、ショッピングモールなど多岐にわたる。そこでのんびりとしたひとときを過ごすことに重きを置いているので、あえて読み聞かせなどはしていない。つまり、本をなかだちにおしゃべりを楽しむ…という具合。また、ひろばの設営をその場の人々と一緒にして、そこで本に触れ、重さや手触りや雰囲気などを感じてもらっている… そんな様子を紹介された。加えて、村中さんと訪れたタイ、バンコクの少年鑑別所で NGO マレットファンとともに子どもと本を楽しんだ経験も話され、言葉が通じなくても、絵の本を通じて人がつながれると結んだ。

一方、こしだミカさんは、7つの顔をもつ「山伏」、体の一部分が鳥になっている「鳥になりたかった男」、体の一部であるラッパからいい空気を醸し出している「ラッパさん」など、多くの造形作品を写真で紹介し、土や生き物、人と精神的につながって創作をしていることを語った。また、こしださんの『アリのさんぽ』（架空社 2005 年）を村中さんと読んだ後、アリの散歩道を紙や布で自由に描くワークショップの様子を写真で紹介した。加えて、村中さんに誘われて行った根室で、いろいろな人と出会い、自然や人の暮らしを知り、『いつか、太陽の船』（新日本出版社 2019 年）の挿絵を描き、根室に通って4年後に絵本『ねむろんろん』（新日本出版社 2021 年）を出版したことを作品とともに紹介した。村中さんは、つながりは、作品を作る過程から始まっており、時間をかけることが力強さを持つとまとめた。また、海辺でナマコに出会ったことから、生物学者の本川達雄先生とつながり、『ナマコ天国』（本川達雄 / 作 偕成社 2019 年）、『ナマコのばあちゃん』（偕成社

2022 年）が生まれたことについても作品を読みながら語った。村中さんからは『女性受刑者とわが子をつなぐ絵本の読みあい』（村中李衣 / 編著、中島学 / 著 かもがわ出版 2021 年）のようなつながりの事例もあることが紹介された。



3人に共通して、すべての子どもたちが本とつながる機会を得る権利があるという信念、しかしながら、そのつながりは、強制的ではなく、自由であるべきで、じっくり時間をかけること、作家であれ、伝え手であれ、つながりたいと思う気持ちが大切であることが語られた。何度も笑いがおき、講師と聞き手もつながることができたラウンドテーブルであった。

（文責：土居安子）

会期中の催し1 「絵の本ひろば」

絵本学会大会会期中、「絵の本ひろば」が開催されました。

「絵の本ひろば」は、絵の本あれこれ研究家の加藤啓子さんが長年実践してこられた、大人も子どもも自由に本に出会うことができる場です。「絵の本ひろば」では、「絵の本」、すなわち絵本、写真本、料理本、川柳本など、絵を読む本が表紙を見せて並べられています。



今回の大会では、大阪大谷大学の模擬保育室と、隣接する庭が「絵の本ひろば」の会場となりました。このうち保育室では、室内の壁に沿って面展台が置かれ、多数の「絵の本」が並べられました。訪れた人は、靴を脱いであがり、床に座って、「絵の本」に囲まれながら、加藤さんや大阪大谷大学幼児教育専攻学生とともに過ごします。あるときには、絵本『ふねをまつ』（笠野裕一作、福音館書店）が共有されていました。「いくで!」や「どういうこと?」という加藤さんのかけ声に、そこにいる人々が『ふねをまつ』に集中します。加藤さんは、いわゆる読みきかせを行いません。読んでも文字通りには読みませんし、文字を読まないこともあります。「絵の本ひろば」にいる人に寄り添い、一緒に「絵の本」を楽しみます。またあるときには、加藤さんと学生たちが絵本『ちいさいうち』（バージニア・リー・バートン文・絵、石井桃子訳、岩波書店）の複数のバージョンの違いを丁寧に見比べていました。「文字を読む」だけでなくすぐに読み終わる本も、「絵を読む」と時間をかけて、深く関わることができます。加藤さんは、人の「絵を読む力」を信じ、本を読む、あるいは文字を読むというある種の緊張感から解放されて「本はおもしろい」と感じる場を提供しようとされていました。そして、そこに居合わせた人々は、対等に過ごしながら「絵の本」を楽しんでいました。



一方で、庭では、「絵の本」が面展台に並べられる他、机の上にも並べられて、「絵の本」を自由に座って読むことができるようにビニールシートが敷かれ、机の周りには椅子が置かれていました。屋外での「絵の本ひろば」には、屋内とはまた違う解放感がありました。

「絵の本ひろば」には人を引き寄せる磁場があり、その中で絵本などがよりどころとなり、人と人が繋がり合っているようでした。「絵の本ひろば」は、「“よりどころ”としての絵本」をテーマとする今回の大会にふさわしい催しだったのではないのでしょうか。

（文責：高原佳江）



会期中の催し2

「展示：教育の現場からの絵本の創造」

教育の現場で今どんな表現が生み出されようとしているのか、生み出されてきたのか、どんな作家が生まれてこうとしているのか。

現状と未来への展望を示すとともに、各校における絵本制作の課題、教育方針、表現活動への取り組み等を提示する展示を行なった。

【各校概要】

○梅花女子大学 こども教育学科（香曾我部秀幸・本展コーディネーター）

1年次に基礎学習、1～2年次に制作と理論的研究、3年次には「卒業制作演習」とステップを積み重ね、物語構想の指導を経て4年次に学びの集大成である卒業制作として絵本制作に取り組み、作家も輩出してきた。一方、2023年度香曾我部氏の定年退任に伴い長きに渡るこのカリキュラムが閉じられることとなった。

○大阪総合デザイン専門学校（吉坂峰子）

自らの心や経験を「オリジナル絵本として表現する」ことを大前提に、ドローイングだけではなく様々な芸術分野の表現技法を用いて同世代から高齢者まで幅広い層を対象とした絵本制作教育を行なってきた。「絵本コース」は2013年に終了したが「通信教育講座（絵本講座）」として絵本制作教育を継続している。

○学校法人瓜生山学園 京都芸術大学（佐藤博一）

多様な学科と通信教育課程、大学院芸術研究科において絵本制作教育と研究が行われアイデア豊かな作品が生み出されている。社会と芸術の関わりを重視した独自の教育プログラムの最終段階として絵本制作がなされる中で、表現と研究課題の多様化の可能性や、領域横断と芸術研究としての必要性を見据えている。

○静岡文化芸術大学 デザイン学部（かわこうせい）

「イラストレーション7枚以上・図版とテキストの融合・本の形状」を条件に3年次選択課題として「しかけ絵本」制作を行なっている。しかけ絵本はあまり多くは流通しないが、学生の課題として制作することで制限なく自由な表現が生み出されていく。絵本の楽しみを広げる多様な成果物が生み出されている。

○筑波大学 芸術専門学群（山本美希）

ビジュアルデザイン領域において絵本やマンガ、イラストレー

ションに関する授業を開講している。総合大学の中の芸術の専門教育機関であることを生かし物語表現のための様々な演習や講義がある。博士前期課程、博士後期課程ではデザインの視点から絵本研究を志す学生たちが制作と理論による研究を行なっている。

○横浜美術大学 イラストレーションコース・絵本専攻（宮崎詞美）

絵本を深く総合芸術として捉え、企画・イラストレーション制作・編集デザイン・印刷・製本を行なった学生作品と完全原稿データを20年以上蓄積。絵本制作を通じて人として生きる力を得ることを目指して制作教育を行なう。2019年には多様な分野のクリエイターや研究者が指導に加わる「絵本専攻」を開設した。



多くの大会参加者が展示会場に訪れ、学生の絵本作品を実際に手に取り熱心に読む姿が見られた。絵本制作教育に取り組んできたそれぞれの学校における豊かな成果物が複数展示された今回の試みはあらゆる視点から「創作すること」そのものが研究・教育として求められていることを強く印象づけた。

（文責：香曾我部秀幸、宮崎詞美）

第 26 回絵本学会定期総会議事録

(本人出席 49 名・委任状出席 186 名)

1. 開会の辞

2. 議長・書記の選出

議長に丸尾美保理事、書記に長野麻子理事が選出された。

3. 会長挨拶

藤本朝巳会長より挨拶が行われた。始めに開催校の大阪大谷大学教職員各位、鈴木穂波大会実行委員長ならびに大会実行委員各位への謝辞が述べられた。続いて昨年 10 月に逝去された三宅興子元絵本学会会長への追悼の辞と黙祷が捧げられた。また来年度の絵本学会大会に関して、開催地が未定のため、会員に協力が呼びかけられた一方で、再来年度(2025 年度)大会は白百合女子大学で開催予定であることが告げられた。

4. 2022 年度活動報告

佐々木由美子事務局長より、資料に基づき 2022 年度の活動報告が行われ、承認された。

5. 2022 年度決算・会計監査報告

佐々木事務局長より、資料に基づき 2022 年度の決算と会計監査結果が報告され、承認された。

6. 2023 年度活動計画について

佐々木事務局長より、資料に基づき 2023 年度の活動計画案が伝えられ、承認された。活動計画として会員名簿を発行することが説明された。

7. 2023 年度予算案について

佐々木事務局長より、資料に基づき 2023 年度の予算案が伝えられた。説明にあたり、年会費の振込用紙が送られて来る封筒の差出人が毎日学術フォーラムであるため、絵本学会と明示していただけるとありがたいとの要望が会員より出された。これに対し、可能か否か検討を行うが、委託料金が追加で発生する可能性があるとの回答がなされた。また事務局業務委託に伴い、毎日学術フォーラムから振込用紙が送付されることを予め会員に通知していなかったことへのお詫びもなされた。この後、予算案の採決が行われ、可決承認された。

8. 学会会則 理事選出規則、監事選出規則の改正について

藤本会長より、理事・監事の選出方法を郵送のみならず、電磁的方法も可能とする理事選出規則および監事選出規則の改正案が資料に基づき説明された。説明にあたり、電磁的方法の具体的手段に関する質疑が会員より出された。これに対し、Google フォームを使用したい旨の回答がなされたが、Google フォームを使用した場合、投票者とその投票先が明らかになるのではないかと意見が述べられ、さらに検討を行うことが示された。この後、電磁的方法の検討も含めた改正案の採決が行われ、可決承認された。

9. 学会会則の改正 名誉会員の創設について

藤本会長より、長年にわたり絵本学会に功績のあった会員に対する名誉会員の身分を創設するため、学会会則の改正案が資料に基づき説明され、可決承認された。

10. その他の項目

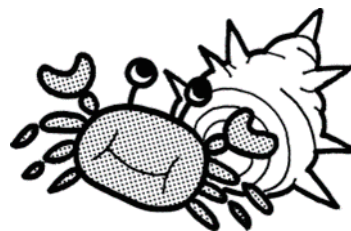
本大会の鈴木実行委員長の挨拶と実行委員の紹介が行われた。

11. 質疑応答

各審議に関する質疑応答は既述した通りである。

12. 閉会の辞

藤本朝巳会長より閉会の辞が述べられた。



絵本学会 2022 年度活動報告

◎第 25 回絵本学会大会の開催

2022 年 6 月 11 日(土)、12 日(日) 小田原短期大学
(神奈川県小田原市)

オンライン開催

テーマ：共生の時代と絵本のゆくえ

◎企画委員会の活動

・絵本フォーラム 2022「しかけ絵本のいま」

2023 年 2 月 7 日(火)～2 月 23 日(木) オンライン開催

さくらいひろし氏・村上妃佐子氏

◎紀要編集委員会の活動

・絵本学会研究紀要『絵本学』第 25 号の編集・刊行

・2022 年度絵本研究参考文献目録(2022 年 1 月～12 月
発行分)の作成

・2022 年度絵本原画展・絵本画家展リスト(2022 年 1 月～
12 月開催分)の作成

◎機関誌編集委員会の活動

・機関誌『絵本 BOOKEND 2022』の編集・刊行、『絵本
BOOKEND2023』編集

・バックナンバーの販売促進

◎研究委員会の活動

・2022 年度絵本研究会の開催

「ベッティナ・ヒューリマンの働きー日本の絵本を世界にー」

2022 年 10 月 29 日(土)

講師：眞壁伍郎氏

・絵本研究助成

2022 年度助成(3 件 計 13 万)

①研究テーマ：フランスにおける絵本研究の歴史的変遷と
動向の調査検討

申請者：伊藤敬佑(白百合女子大学非常勤講師)

②研究テーマ：前衛芸術家が手掛けた絵本の仕事ー1990
年代～2020 年

申請者：児玉茜(国立国際美術館研究補佐員／金城学
院大学非常勤講師)

③研究テーマ：絵本に描かれた「いじめ」の登場人物と
ストーリーの国際比較研究ーいじめでの役割分化といじめ
の解決パターンのちがいー

申請者：仁平義明(星槎大学大学院教育学研究科教授)

共同研究者：伊豆田麻子(星槎大学客員研究員)

◎広報委員会の活動

・『絵本学会NEWS』の編集・発行

73 号(2022.7.30)、74 号(2022.11.30)、75 号(2023.3.31)

・ホームページの管理

◎日本絵本研究賞運営委員会の活動

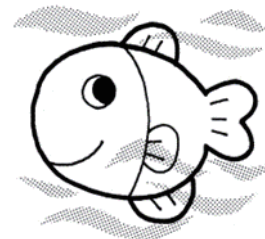
・第 5 回日本絵本研究賞等候補(2022)の選考

◎他学会等との連携

◎入退会

2022 年度新入会者 39 名 退会者 23 名 除籍者 6 名

(2023 年 3 月末現在)



絵本学会 2023 年度活動計画

◎第 26 回絵本学会大会の開催

2023 年 6 月 18 日(土)、19 日(日)

大阪大谷大学志学台キャンパス

テーマ：“よりどころ”としての絵本

◎企画委員会の活動

・絵本フォーラム等の開催

◎紀要編集委員会の活動

・絵本学会研究紀要『絵本学』第 26 号の編集・刊行

・2023 年度絵本研究参考文献目録(2023 年 1 月～12 月
発行分)の作成

・2023 年度絵本原画展・絵本画家展リスト(2023 年 1 月～
12 月開催分)の作成

◎機関誌編集委員会の活動

・機関誌『絵本 BOOKEND 2023』の編集・刊行、『絵本
BOOKEND2024』編集

・バックナンバーの販売促進

◎研究委員会の活動

・研究会の開催

・絵本研究助成

◎広報委員会の活動

・『絵本学会NEWS』の編集・発行 年 3 回(76、77、78
号)の予定

・ホームページの管理

◎日本絵本研究賞運営委員会の活動

・日本絵本研究賞の運営検討・表彰

◎会員名簿の作成

◎理事選挙

◎他学会等との連携

◎その他



絵本学会 2022 年度決算報告書

2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日

単位:円

科目	予算額	決算額	増減(予-決)	
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	4,180,000	4,378,000	-198,000	
賛助会員	140,000	140,000	0	20,000×7口分(現在7団体)
正会員	4,000,000	4,192,000	-192,000	8,000×延492名+新入会32名=524名(3/31現在)
準会員	40,000	46,000	-6,000	延べ準会員a3名+新入会準会員a3名、準会員b8名
②事業収入	200,000	366,030	-166,030	
研究活動事業収入	0	0	0	
フォーラム収入	0	57,726	-57,726	チケット1000円 販売数68 決算処理費用10,064円
研究会収入	0	0	0	オンライン開催のため無料
出版事業収入	200,000	308,304	-108,304	『絵本BOOK END』売上(湖北社2022分、文伸2021分)
③雑収入	130,020	84,437	45,583	
受取利息収入	20	12	8	
入会金収入	80,000	70,000	10,000	入会金2000円×35名
雑収入	50,000	14,425	35,575	出版物在庫販売
事業活動収入合計	4,510,020	4,828,467	-318,447	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,140,000	1,692,672	447,328	
人件費支出	700,000	714,312	-14,312	
事務局報酬支出	0	0	0	
事務局委託費	700,000	714,312	-14,312	毎日学術フォーラムに委託
事業費支出	1,440,000	978,360	461,640	
消耗品費支出	30,000	2,184	27,816	事務消耗品費
印刷製本費支出	610,000	477,049	132,951	
絵本学会ニュース	150,000	125,830	24,170	絵本学会NEWS72.73.74号
研究紀要	400,000	313,885	86,115	『絵本学』24号
会員名簿	0	0	0	
その他	60,000	37,334	22,666	学会封筒印刷代
通信運搬費支出	500,000	342,812	157,188	NEWS等発送費・通信費
旅費交通費支出	50,000	0	50,000	理事会は原則オンライン
会議費支出	0	0	0	
広告費支出	160,000	150,190	9,810	
印刷物制作費支出	0	0	0	
HP更新作業費支出	160,000	150,190	9,810	
振込手数料	10,000	6,125	3,875	
雑支出	80,000	0	80,000	「研究倫理規程」作成費用含む
②活動費支出	1,170,000	760,277	409,723	
大会運営補助金支出	400,000	206,379	193,621	オンライン開催
第25回 絵本学会大会補助金	400,000	206,379	193,621	
専門委員会活動費支出	620,000	423,898	196,102	
企画委員会	170,000	158,852	11,148	
紀要編集委員会	100,000	52,697	47,303	紀要編集等
機関誌編集委員会	100,000	89,476	10,524	『絵本BOOKEND2022』編集
研究委員会	100,000	60,080	39,920	研究会主催
広報委員会	100,000	49,885	50,115	『絵本学会NEWS』編集
日本絵本研究賞運営委員会	50,000	12,908	37,092	
研究助成費支出	150,000	130,000	20,000	
③出版事業支出	1,200,000	1,216,380	-16,380	『絵本BOOKEND2021』
編集作業費支出	0	0	0	
制作費支出	1,200,000	1,216,380	-16,380	
事業活動支出合計	4,510,000	3,669,329	840,671	
事業活動収支差額	20	1,159,138	-1,159,118	
事業活動収支差額	20	1,159,138	-1,159,118	

II 投資活動収支の部

1.投資活動収入	0	0	
	0	0	
投資活動収入計	0	0	
2.投資活動支出			
投資活動支出計	0	0	0
投資活動収支差額	0	0	0
III財務活動の部			
1.財務活動収入			
長期借入金収入	0	0	0
財務活動収入計	0	0	0
2.財務活動支出			
長期借入金返済支出	0	0	0
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
IV予備費支出	200,000	0	0
当期収支差額	-199,980	1,159,138	-1,359,118
前期繰越収支差額	4,671,638	4,671,638	0
次期繰越収支差額	4,471,658	5,830,776	-1,359,118

■ 2022 年度 _ 財産目録

単位：円

	項目	一般会計	20周年積立金	合計
2022/3/31				
	手元有高			0
	りそな銀行	0		0
	ゆうちょ銀行	1,450,304		1,450,304
	定期貯金	0	1,500,000	1,500,000
	振替口座	3,074,208		3,074,208
	未収金	147,126		147,126
	仮払金	0		0
	細目不明金	0		0
	計 ①	4,671,638	1,500,000	6,171,638
2023/3/31				
	1年後の増減 ②	1,159,138	0	1072958
	結果 ①+② ③	5,830,776	1,500,000	7,330,776
	結果③の内訳			
	手元有高	0		
	りそな銀行	0		
	ゆうちょ銀行	3,366,453		1,450,304
	定期貯金		1,500,000	1,500,000
	振替口座	2,055,813		4,375,698
	未収金 *	10,700		
	仮払金	400,000		
	未払金	▲2190		
	計 ④	5,830,776	1,500,000	7,330,776
		収支計算書の 前期繰越		財産目録の 次年度繰越

* 未収金内訳：機関誌編集委員会返金分10524円 紀要委員会返金不足分176円



絵本学会 2023 年度予算

2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日

単位: 円

科目	予算額	前年度予算額	増減(予一決)	
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	4,340,000	4,180,000	160,000	
賛助会員	140,000	140,000	0	20,000×7口(現在7団体)
正会員	4,160,000	4,000,000	160,000	8,000×520名(現在約530名)
準会員	40,000	40,000	0	準会員約10名
②事業収入	270,000	200,000	70,000	
研究活動事業収入	20,000	0	20,000	
フォーラム収入	20,000	0	20,000	
研究会収入	0	0	0	
出版事業収入	250,000	200,000	50,000	『絵本BOOK END』売上
③雑収入	130,020	130,020	0	
受取利息収入	20	20	0	
入会金収入	80,000	80,000	0	入会金2000円×40名
雑収入	50,000	50,000	0	出版物在庫販売等
事業活動収入合計	4,740,020	4,510,020	230,000	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,350,000	2,140,000	210,000	
人件費支出	720,000	700,000	20,000	
事務局報酬支出	0	0	0	
事務局委託費	720,000	700,000	20,000	毎日学術フォーラムに委託
事業費支出	1,630,000	1,440,000	190,000	
消耗品費支出	30,000	30,000	0	事務消耗品費
印刷製本費支出	810,000	610,000	200,000	
絵本学会ニュース	150,000	150,000	0	絵本学会NEWS75,76,77号
研究紀要	400,000	400,000	0	『絵本学』25号(2023)
会員名簿	200,000	0	200,000	
その他	60,000	60,000	0	学会封筒印刷代
通信運搬費支出	500,000	500,000	0	ニュース等発送費・通信費・選挙
旅費交通費支出	40,000	50,000	-10,000	理事会は原則オンライン
会議費支出	0	0	0	
広告費支出	160,000	160,000	0	
印刷物制作費支出	0	0	0	
HP更新作業費支出	160,000	160,000	0	
振込手数料	10,000	10,000	0	
雑支出	80,000	80,000	0	「研究倫理規程」作成費用含む
②活動費支出	1,170,000	1,170,000	0	
大会運営補助金支出	400,000	400,000	0	ポスター等制作費を含む
第26回 絵本学会大会補助金	400,000	400,000	0	
専門委員会活動費支出	620,000	620,000	0	
企画委員会	170,000	170,000	0	
紀要編集委員会	100,000	100,000	0	紀要編集等
機関誌編集委員会	100,000	100,000	0	『絵本BOOK END』編集
研究委員会	100,000	100,000	0	研究会主催
広報委員会	100,000	100,000	0	『絵本学会ニュース』編集
日本絵本研究賞運営委員会	50,000	50,000	0	
研究助成費支出	150,000	150,000	0	
③出版事業支出	1,220,000	1,200,000	20,000	『絵本BOOKEND2023』
編集作業費支出	0	0	0	
制作費支出	1,220,000	1,200,000	20,000	
事業活動支出合計	4,740,000	4,510,000	230,000	
事業活動収支差額	20	20	0	
事業活動収支差額	20	20	0	

研究委員会からのお知らせ

◎ 2023 年度絵本研究会開催のお知らせ

研究委員会では、会員の皆様と絵本研究を深めていく機会となるよう、今年度も絵本研究会を開催します。2023 年度は斎藤惇夫先生に、「瀬田貞二さんについて」と題してご講演いただくことになりました。

斎藤惇夫先生は、1940 年新潟県生まれ。福音館書店編集者を経て 2000 年より作家活動に専念し、現在も子どもたちに読み継がれている『冒険者たちーガンバと 15 ひきの仲間』、『グリックの冒険』、『ガンバとカワウソの冒険』（岩波書店）などの児童文学作品を生み出してこられました。現在は長年の児童書編集の経験をもとに、子どもを本の世界に導くことについて、著作やご講演を通して発信されています。また、2021 年からは、さいたま市の麗和幼稚園園長を務められ、エッセイ集『子ども、本、折り』（教文館書店、2021 年）では、本気になって園児たちと遊ぶ日常生活の記録、子どもと絵本・物語について語った連載などがまとめられています。

2002 年に刊行された『子どもと子どもの本に捧げた生涯ー講演録 瀬田貞二先生について』（キッズメイト）は、瀬田貞二の姿を縦糸、日本の児童文学の歴史を横糸として語られたものです。今回はその瀬田貞二について、あらためてご講演いただきます。2021 年度絵本研究会で「『絵本画家 赤羽末吉 スーホの草原にかけける虹』を語る」と題してお話くださった赤羽茂乃さんのご参加も企画中です。

2022 年度絵本研究会「ベッティーナ・ヒューリマンの働きー日本の絵本を世界にー」の眞壁伍郎先生とは、ご同郷で旧知の仲という斎藤惇夫先生。数珠繋ぎのような絵本研究会も、今回が最後となります。皆様のご参加をお待ちしております。

（文責：鈴木穂波）

講演会「瀬田貞二さんについて」

*日時：2023 年 12 月 16 日（土）14:00 ～ 16:00

*講師：斎藤惇夫氏

*開催方法：Zoom（ズーム）を用いたオンライン開催

*定員：100 名（先着順）

*参加費：無料

（絵本学会会員外の方も参加可能です。参加受付開始日は会員と異なります。）

*申し込み受付開始

絵本学会会員：10 月 1 日（日）9:00 から

一般参加者：11 月 1 日（水）9:00 から

どちらも受付締め切りは 11 月 30 日（木）20:00 まで

*申し込み方法：Google フォームにてお申込みください。

<https://forms.gle/LN3pMPE4gGDre9KW6>



参加者には、12 月 9 日（土）頃に Zoom の URL をメールにてお知らせする予定です。

【お願い】

*参加 URL は、申込者のみにお知らせします。外部に漏らすことはお控えいただき、必ずお一人ずつお申込みください。

*録画や録音、画面の撮影やスクリーンショットはお控えください。掲示資料に関する著作権、参加者の個人情報保護の観点からも、厳守をお願い致します。

*記録用に録画しますが、個々の通信環境の不備などのご事情に関わらず録画配信は行いません。

*Zoom の使い方や通信環境などのサポートはできかねますが、ご了承ください。

参加者には、URL お知らせ時に Zoom への参加方法についてご連絡します。

*問い合わせ先：

絵本学会研究委員会 ehongakkai.kenkyu@gmail.com

紀要編集委員会からのお知らせ

『絵本学』第26号投稿募集

『絵本学』第26号(2024年3月刊行予定)の投稿を募集します。下記の投稿規程ならびに絵本学会ホームページに掲載の執筆要綱を十分お読みの上、投稿規程に違反しないよう、細心の注意をお払いください。

投稿締切日：2023年9月30日(必着)

原稿送付先・問い合わせ先：ehongaku.kiyo@gmail.com

絵本学会紀要編集委員会

研究紀要『絵本学』投稿規程

1. 投稿資格

絵本学会会員および準会員で、当該年度8月31日までに会員資格を有していること。

2. 投稿の種類

絵本に関する研究論文、研究ノート、論説で未発表のもの。

【研究論文】研究の視点や手法、理論展開および結論に独創性や説得力が高く認められるもの。

【研究ノート】研究の基礎データになる資料調査・実践などの報告、あるいは理論構築の可能性が認められるもの。

【論説】学術的な論で、注目すべき研究・作品・作家・展覧会・活動を取り上げての評論など。

3. 投稿原稿の採否

- 1) 査読に基づき、紀要編集委員会が採否を決定する。必要に応じて紀要編集委員の外に査読を依頼する。
- 2) 紀要編集委員会は執筆者に内容の修正を求める場合がある。
- 3) 採否の結果は当該年12月末までに執筆者に通知する。執筆者は採否の結果について説明を求めることができる。この場合、紀要編集委員会は申し出内容を精査の上、適正範囲内で回答する。

4. 執筆要領

執筆は別に定める「執筆要項」(絵本学会ホームページに掲載)に則ること。

5. 著作権

- 1) 『絵本学』に掲載される論文等の著作権は執筆者に帰属する。執筆者は掲載決定後、絵本学会に、著作権のうち複製権の行使を再許諾権付きで許諾するものとする。

- 2) 論文等に引用される文章、図版、写真等の著作権に関する事項はあらかじめ執筆者の責任において処理すること。

6. 研究倫理

- 1) 研究は十分な倫理的配慮の上に行うこと。
- 2) 個人事例を取り上げる際には、個人情報や秘密を保護することに配慮する。研究対象者・保護者・所属長、研究協力者などから文書による承諾を得、論文等にその旨を記載する。

7. 投稿締切日

当該年9月30日(必着)

8. 刊行

当該年度内

9. 原稿の送付

- 1) 原稿は電子データをメールに添付して送付する。
- 2) 原稿送付先：絵本学会紀要編集委員会(メールアドレスは別に指定)

規程の改廃は理事会の審議を経て決定される。

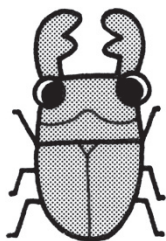
改正日 2022年3月9日

事務局より

◎絵本学会会員名簿発行のお知らせ

『絵本学会 会員名簿（2023 年度版）』の発行を予定しております。

つきましては、同封しております「会員情報アンケート」をご覧ください、会員情報のご提供にご協力くださいますようお願い申し上げます。



役員選挙のお知らせ

◎理事、監事の選挙があります

理事、監事の候補者をご推薦ください

- 自薦・他薦可、何名でもかまいません。
- 〈絵本学会事務局「選挙管理委員会」〉まで
メール (ehongakkai.senkyo@gmail.com) でご推薦ください。
- 締切は 2023 年 9 月 30 日 (土) 必着。

「推薦する人」と「推薦される人」の名前を明記してください。

- ・任期は 3 年。理事は 10 名の内 7 名は正会員の選挙で任命されます。3 名は理事会の推薦を得て会長が任命します。
- ・選挙による理事候補者は、70 歳を越えない会員となっておりますので、ご推薦の際はご注意ください。
- ・理事を直前に連続 2 期続けた会員（藤本朝巳、丸尾美保、佐々木由美子、鈴木穂波、長野麻子、甲木善久）は、今回の選挙では候補者とはなりません。
- ・監事は、任期や年齢の期限がありません。

候補者を決定して以後の選挙日程

- 選挙管理委員会が、推薦された候補者の名簿を作成します。
 - 絵本学会 NEWS77 号 (2023 年 12 月発送) の発送時に候補者名簿と投票先を記した選挙関連書類を同封いたします。
 - 投票締切は 2024 年 1 月 31 日 (水) です。Google フォームかメールにて投票してください。
 - 選挙の結果は、絵本学会ホームページと「絵本学会 NEWS」78 号 (2024 年 4 月発送) で公表します。
 - 選出された新理事 (候補) の互選によって会長 (候補) が決定し、会長 (候補) 推薦による事務局長 (候補) と 3 名の理事 (候補) を含む新理事会は、5 月の総会で会員の承認を経たうえで、正式に発足します。
- ★ 2024 年 5 月の総会までは、現役員が業務を担当します。

〈参考〉※絵本学会ウェブサイト

(<http://www.ehongakkai.com/about/pg10.html>) より転載

絵本学会理事会報告

◎ 2022 年度 絵本学会 第 5 回理事会 議事録

日時：2023 年 3 月 3 日 (月) 20:00～22:00 於：オンライン

出席：藤本朝巳（会長） 丸尾美保（会長代理）

佐々木由美子（事務局長） 鈴木穂波

長野麻子 馬見塚昭久 水島尚喜 宮崎詞美

山本美希

欠席：甲木善久

司会：藤本朝巳

記録：宮崎詞美 *次回、山本先生。以後、五十音順で担当

【議事】

報告審議に先立ち、前回 2022 年度第 4 回絵本学会理事会議事録内容が、一部修正のうえ承認された。

◆報告事項

1. 各委員会報告

① 企画委員会

山本委員長より資料に基づき、絵本フォーラムの実施報告がされた。

会場校の協力でカメラ3台を用いて臨場感のある映像となったこと、アンケートの結果も概ね好評だったこと、また、研究者の講演会を望む声や、対談や意見交換を望む声があったことが合わせて報告された。

② 紀要編集委員会

長野委員長より、紀要 25 号についての進捗状況が報告された。現在校正中で、3 月末刊行予定である。内容は、研究論文 1 本、研究ノート 3 本、研究参考文献目録、絵本原画展ならびに絵本に関連する展覧会リストであることが報告された。

③ 機関誌編集委員会

藤本機関紙編集委員長代行より、資料のとおり『絵本 BOOKEND』2023 企画案が示された。特集企画は、松居直さん追悼特集とし、生田副編集長が中心になって進めている旨、報告された。また、『絵本 BOOKEND』2022 は発行が遅れたため、売り上げの調査がまだできない状況であることが共有された。

④ 研究委員会

鈴木委員長より、絵本研究会 2023 の進捗状況について資料の通り報告された。

斎藤惇夫先生を講師に迎え、「瀬田貞二」について講演の予定。時期は、2023 年 11 月中旬以降とし、オンライン開

催で準備を進めていることが報告された。

⑤ 広報委員会

馬見塚委員長より、HP 上の絵本学会 NEWS の 41 号から 50 号の不足分について、光陽メディアに依頼し、PDF 化し、掲載したことが報告された。まだ 44 号が欠落しているため、本部の保管分から PDF 化する旨が確認された。

また、絵本学会 NEWS のイラストを新規募集することもあわせて報告された。

⑥ 日本絵本研究賞運営委員会

水島委員長より、資料に基づき、2022 年度日本絵本研究賞審査結果報告がされた。2022 年度（一次選考）は研究賞 11 点、特別賞 4 点となる充実した内容となった。また、今後、名称は「一次選考（年次）」「本選考」に統一していく意向であることが共有された。2023 年度は第 5 回本選考年度となる（3 年分から選考）。

2. 事務局より

佐々木事務局長より以下の 4 点について報告があった、

① 日本学術振興会賞の推薦依頼について

日本学術振興会より優れた研究に対する推薦依頼があったことが報告された。

今年度については、日本絵本研究賞および紀要掲載論文の中から、推薦できるものがあるかを検討していくこととなった。日本絵本研究賞運営委員会の水島委員長および紀要編集委員会の長野委員長が検討し、3 月末までに会長に推薦結果を提出し、学会として推薦していくことが確認された。

② 献本について

岐阜大学今村光章氏より、『環境教育学のために』の寄贈があったことが報告された。

③ 次年度の各委員会予算の確認

2023 年度予算案作成のため、各委員会に予算申請の依頼がなされた。

④ 研究倫理規程作成状況

2022 年度分の予算に盛り込んでいたが、今年度中に作成が難しいことが長野委員長より報告されたため、23 年度へ先送りし、次年度執行することが確認された。

3. その他

◆審議事項

1. 入退会者について

審議の結果、以下の新入退会者、および除籍者（敬称略）が承認された。

入会 正会員

浅井彰子 良永達信 小川房子 志摩秀子 佐藤広也
5名

退会

1. 糸井嘉 2. 加藤康子 3. 川野洋子(逝去)
4. 北森芳徳、 5. 小林奈緒美 6. 近藤昭子
7. さいとうれいこ 8. 白凜
8名(22年度末の全退会者数 12名)

除籍(2021-22年度分年会費未納者)

1. 榎本綾子 2. 酒井倫子 3. 柘植真知子
4. パンオン百合 5. 松井友子
6. ミシェル・カナアン
6名

2. 後援依頼について

武井武雄記念館「日本童画大賞」の後援依頼について
審議の結果、承認された。

応募締め切り 2023年11月27日(月)について
作品展 2024年2月9日～18日

3. 2023年度研究助成応募申請要綱について

鈴木委員長より、資料に基づき、要綱および申請用紙について説明があり、審議の結果、承認された。NEWS75号掲載、学会ホームページで告知する予定である。

募集開始:2023年6月1日(水)
締め切り:2023年6月30日(金) 必着

4. 2023年度第26回絵本学会大会について

鈴木大会実行委員長より、資料に基づき、大会詳細、座組み、大会までのスケジュール等の説明があり、原案通り承認された。座長についても、審議され、以下のように決定した。

・17日(土)

研究A室:生駒、藤本 研究C室:土居、水島
研究D室:丸尾、長野

・18日(日)

研究A室:生田、馬見塚 研究C室:山本、佐々木
研究D室:村中、鈴木

作品発表:香宗我部、宮崎

また、大会プログラム等については、ちらしを作成するだけでなく、NEWS75号にも詳細を掲載する予定である。

5. 三宅興子先生への献花について

丸尾会長代理より、2022年10月にご逝去された三宅興子氏の追悼礼拝、しのぶ会が2023年9月2日梅花女子大

学で行われる予定であることが報告され、絵本学会から献花を行うことが承認された。また、次回大会総会の中で追悼の機会を持つことと、NEWS75号に追悼文を掲載することもあわせて承認された。今後の献花や追悼のあり方については、制度化せず、都度検討するのがよいのではないかと意見がだされた。

6. 名簿の発行について

名簿の発行について、2023年度に発行することが確認された。これまで年度が変わる4月に発行してきたが、異動等の多い時期を避け12月頃に作成発行することが承認された。

7. 選挙告知について

2023年度に予定される理事会役員選挙について、会則にのっとり行うこと、NEWS77号(11.30付)で選挙告知を行うことが確認された。

8. その他

藤本会長より、次年度大会開催校として候補があれば推薦をして欲しい旨と、白百合女子大学に打診する予定であることが報告された。

次回の理事会日程について

2023年5月初旬(連休明けくらい)の予定とし、今後調整していく。

◎ 2023年度 絵本学会 第1回理事会 議事録

日時:2023年5月5日(金)10:30～12:27 於:オンライン

出席:藤本朝巳(会長) 丸尾美保(会長代理)

佐々木由美子(事務局長) 鈴木穂波 長野麻子

馬見塚昭久 水島尚喜 宮崎詞美 山本美希

欠席:甲木善久

司会:藤本朝巳

記録:山本美希 *次回、丸尾先生。以後、五十音順で担当

前回2022年度第5回絵本学会理事会議事録および2023年度第1回メール審議議事録の確認を行い、承認された。

◆報告事項

1. 各委員会報告

①企画委員会
とくになし

②紀要編集委員会(長野委員長より)

・『絵本学』25号の刊行 660部納品されたことが報告された。
・委員の退任と後任委員について 竹内先生の退任と、次の

委員（任期1年）は検討中であることが報告された。

・協力員の委嘱について 紀要編集委員会の編集事務（印刷会社とのやりとりや原稿チェック等）を、協力員へ依頼予定であることが報告された。

※学会員への謝礼については、今後、学会全体で統一する方向で検討することが確認された。

③機関誌編集委員会（藤本編集委員長代行より）

『絵本 BOOKEND』2023（20号）の進捗状況について

（資料1）現在の進捗状況について説明があり、原稿依頼が進められていることが報告された。

④研究委員会（鈴木委員長より）

2022年度の研究助成についての報告および2023年度活動計画について（資料2）

2022年度に採択した研究助成報告3件について報告があった。うち2件について、助成金を使用したのが3月末であったことが共有された。

⑤広報委員会（馬見塚委員長より）

今年度の予定について報告された。

⑥日本絵本研究賞運営委員会（水島委員長より）

今年度の予定について報告された。

2. 事務局より（佐々木事務局長より）

・4月の発送の際に、絵本学会大会出欠はがきを「会費納入のお願い」に同封したことについて、出欠を問うものは親書に当たる可能性があったための処置であったという事情が共有された。

◆審議事項

1. 入退会者について（資料3）以下の10名の新入会員が承認された。

正会員：竹迫祐子 立川真理恵 高橋庸平 小袋朋美

藤川和也 魏辰宸 延原みか子 土岐玲奈

準会員a：武田直子 準会員b：金知栄

2. 第26回絵本学会大会役割分担について（資料4）

鈴木大会実行委員長の原案通り承認された。

3. 2022年度決算報告（資料5①②）および2023年度予算案について（資料6）

決算報告と予算案が承認された。入会者増のため、事務局委託費が増加した。2023年度は名簿の作成があるため、その予算を計上。日本絵本研究賞については、次年度の絵本学会大会にて表彰するため、賞状・賞金等は2024年度予算からの支出とする。

4. 2022年度事業報告および2023年度活動計画について（資料7）

各委員会の活動計画について確認した。

・名簿の作成について 予算は見積もり中。業者へ依頼予定。

・次期理事選挙について これまでは郵送による選挙だったが、今回オンライン上にて選挙を行う可能性があることが提案され、承認された。あわせて絵本学会大会の総会にて会則の改正について承認を得ることとする。

5. 各委員会

広報委員会（馬見塚委員長）より、『NEWS』76号（7/31発行予定、6/30原稿〆切）の内容の予定が示された。大会報告に関する執筆の分担については、後日各理事及び大会関係者へ依頼することとなった。

6. その他

藤本会長より、2024年度の大会開催校について継続して検討中であり、候補を検討するよう依頼があった。

次回の予定

2023年6月11日（日）20：00～

◎ 2023年度理事会 第1回メール審議議事録

日時：2023年4月1日（月）発信

回答：藤本朝巳（会長） 丸尾美保（会長代理）

佐々木由美子（事務局長） 鈴木穂波 長野麻子

馬見塚昭久 水島尚喜 宮崎詞美 山本美希

◆審議事項

1. 新入会員について

以下の新入会者（敬称略）が承認された。

入会者：正会員 谷原舞 松永郁香 小野由美子

吉田治美 山内棕子

2. 後援依頼

以下の主催団体より後援名義使用の申請があり、絵本学会として後援することが承認された。

①高志の国文学館

展示タイトル：降矢なな原画展

開催場所：高志の国文学館

会期：2023年6月24日（土）～9月4日（月）

②ちひろ美術館・東京 / 安曇野ちひろ美術館

展示タイトル：谷内こうた展 風のゆくえ

開催場所：ちひろ美術館・東京

会期 2023年6月24日～10月1日

展示タイトル：ちひろ美術館セレクション 2010 → 2021

日本の絵本展

開催場所 安曇野ちひろ美術館

会期 2023年6月3日～9月3日

開催場所 ちひろ美術館・東京

会期 2023年10月7日～2024年1月14日

③軽井沢絵本の森美術館

展示タイトル：2023年夏展「童話のなかのアンデルセン」

開催場所：軽井沢絵本の森美術館

会期：2023年6月23日（金）～2023年10月9日（月）

2023年度理事会 第2回メール審議議事録

日時：2023年6月2日（月）発信

回答：藤本朝巳（会長） 丸尾美保（会長代理）

佐々木由美子（事務局長） 鈴木穂波 長野麻子

馬見塚昭久 水島尚喜 宮崎詞美 山本美希

◆審議事項

1. 新入会員について

以下の新入会者（敬称略）が承認された。

入会者：正会員 高橋育子 黒川麻実 杉上佐智枝

井川幸子 檜木彩 石川素子 佐々木実保子

以上7名

編集後記

第26回絵本学会大会が成功裡に終了しました。おかげ様で今号も盛りだくさんの内容となりました。大会の熱気をお楽しみいただけましたら幸いです。お忙しい中、短期間で大会報告をご執筆くださいました皆様、そして大会関係者の皆様、ご参加された皆様に心より感謝申し上げます。

（馬見塚昭久）

絵本を手にとって読む、一緒に読み合う。

この大切さを心に深く感じることで、あたたかみのある学会大会でした。今号もご協力いただきましたみなさまに感謝申し上げます。

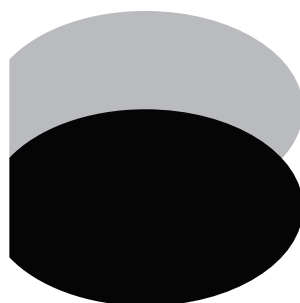
（宮崎詞美）

学会後のお忙しい中、原稿をお寄せくださった皆様、ありがとうございました。お陰様で充実した学会報告となりました。私自身は急な所用により学会に参加することができず、残念な思いがしておりますが、「NEWS」のおかげで、一緒に参加させていただいているような気持ちになりました。また次の大会でお会いできますよう、楽しみにしております。

（松本由美）

三年ぶりの対面大会で、とても充実した二日間でした。「NEWS」で、その充実した時間をお伝えできる幸いをありがとうございます。ご執筆くださった皆さまに心から感謝します。

（尹恵貞）



絵本学会